

アクティブ・ラーニングを取り入れた効果的な授業づくりに関する研究：「教職論」の授業考察を通して

大石 正廣

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: moishi-918@shoin.ac.jp

Study on making of effective class that adopted active learning: Through the consideration of the class of “the teaching profession theory”

OISHI Masahiro

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

アクティブ・ラーニングを取り入れた能動的な学修、学修者の学びの深まり、学びの質の向上を実現する授業デザインが授業改善の課題となっている。そのため、本稿では、アクティブ・ラーニングを取り入れた効果的な授業づくりについての検討をおこなった。具体的には、アクティブ・ラーニングを取り入れることがなぜ必要なのか、どのようなアクティブ・ラーニングをどう取り入れるのか、効果的な授業ではどのような学習成果を求めるのかを検討した。このような、観点から、授業実践（「教職論」対象1年生 2016年実施）を取り上げ、アクティブ・ラーニングを取り入れた効果的な授業について考察をおこなった。考察では、学びの質の深まりを図る上で、アクティブ・ラーニングを効果的に取り入れるいくつかのポイントを確認することができた。授業内容、授業学年等により、効果的な授業デザインのバリエーションが求められる。学修者の学びの質の深まりを評価することの必要性と、その手立ての一つとして、ポートフォリオ評価を取り入れることの効果についても考察した。

Of the learning of active learning, learner which adopted active learning deepen, and it is a problem of improving it a class a class design realizing improvement of the quality of the learning. Therefore, in this report, I performed the examination about the making of effective class that adopted active learning. Specifically, I examined it what kind of active learning you took in how why it was necessary to adopt active learning what kind of learning result you demanded by the effective class. From such a

point of view, I took up class practice (first grader 2016 enforcement targeted for “a teaching profession theory”) and considered the effective class that adopted active learning. I was able to check some points to adopt active learning effectively in planning deepening of the quality of the learning for the consideration. By class contents, a class school year, the variation of the effective class design is found. I considered the effect of taking in a portfolio evaluation as need of evaluating deepening of the quality of the learning of the learner and one of the means.

キーワード：教職論、学びの質、ポートフォリオ評価、授業改善

Key Words: teaching profession theory, quality of the learning, portfolio evaluation, Class improvement

I. アクティブ・ラーニングを取り入れた効果的な授業とは

1. 求められる授業改善の課題

「教えること」を学習者の「学び」に変える。学習者を主体的な学び手に育てることに向けた授業改善は、初等中等教育の現場でも課題として、実践研究が進められている。大学教育においても、中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」(2012)では、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。」として授業改善の課題を明確化している。答申では、「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換」の必要性が述べられ、能動的学修としてアクティブ・ラーニングが求められている。この答申の「用語集」(2012)では、アクティブ・ラーニングを「教員による一方的な講義形式の授業とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義し、授業改善のねらいとして「学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」ことがあげられている。あくまでもアクティブ・ラーニングは、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法であり、授業改善の目標そのものではない。アクティブ・ラーニングを取り入れた授業により、学修者がどのような汎用的能力を身につけることができたかという学びの質が授業改善のポイントとなる。

2. アクティブ・ラーニングを取り入れる必要性

アクティブ・ラーニングを教授・学習法として取り入れるだけでは、「活動あって学びなし」の状態を招くことになり、授業改善の目標には向かえない。つまり、何のためにアクティブ・ラーニングを取り入れるのかを明確にしておく必要がある。アクティブ・ラーニングを取り入れた効果的な授業では、学習の主体的参加率の向上は欠かせないが、さらにねらいとするのは、授業で「何を学ぶことができたか」という学びの質の深まりである。本稿では、学修者がどのような汎用的能力を身につけることができたかという、学びの質を深める授業づく

りのために、どのようにアクティブ・ラーニングを効果的に取り入れていくかを考察の課題とする。

3. アクティブ・ラーニングを取り入れた効果的な授業とは

文部科学省の「初等中等教育における教育課程の有り方について（諮問）」（2015）では、「『何を教えるか』という知識の質や量の改善はもちろんのこと、『どのように学ぶか』という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる『アクティブ・ラーニング』）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。また、学びの成果として『どのような力が身に付いたか』に関する学習評価の在り方についても、同様の視点から改善を図る必要があると考えられます。」とアクティブ・ラーニング充実のねらいが示されている。ここでは、知識の質や量の改善はもちろんのこととしながら、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりが授業成果として取りあげられていることは、注目すべき点である。さらに諮問では、学びの成果としてどのような力が身に付いたかという学習評価の有り方についても改善を求めている。評価については、何をどのように学んできたかという、学修者の学びの履歴を、どのように評価の対象にするかということが課題となってくる。

初等中等教育についての諮問ではあるが、このことは大学の授業にも強く求められていると言える。本稿での効果的な授業とは、学びの質を深めることに有効な授業と措定する。

学びの質を深めることについては、学習者が「何を学び、どのような力が育ったか」を問題とする。具体的には、学修者の学びの質の深まりを、次の4つの観点から見ていく。

- ①授業への主体的参加
- ②内面的な思考を活性化させ、授業目標・内容に対する知識理解、認識を深めている
- ③目標に対しての新たな課題を発見し、探究しようとする意欲を持つ
- ④新たな課題解決のために学んだことを実際に生かそうとする

4. 取り入れようとするアクティブ・ラーニング

本稿で取り入れようとするアクティブ・ラーニングについては、次の溝上（2014）の「一方的な知識伝達型講義を聞くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」という定義を援用する。アクティブ・ラーニングの授業への取り入れでは、学びの質を深められたか、学修者の学びを評価することが求められる。書く・話す・発表する等の言語活動を求めることは、同時に、認知プロセスの外化を求めることになる。このことから、学修者の表現活動をアクティブ・ラーニングとして授業に取り入れていくことがポイントとなる。松下佳代（2015）は、「内化と外化の関係は、内化から外化へという一方的なものではない。いったん内化された知識は、問題解決のために使ったり、人に話したり書いたりするなどの外化活動を通して再構築され、より深い理解になっていく（内化が深まる）。」として、外化と内化を有機的に組み合わせることで、アクティブ・ラーニン

グでの学びが深まるという指摘をしている。この点からも、学びの質を深めるためには、外化したことを聞き合い、内面的思考を深めるコミュニケーション活動が欠かせない。このようなコミュニケーションにおける認知プロセスをも外化していくために、特に書くことをアクティブ・ラーニングの学習活動の核とする。

II. 授業実践を取り上げた考察

本稿では、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践として、教職課程の授業科目「教職論」(2016年度 前期実施)を取り上げる。授業デザインと学修者の学びの考察を通して、効果的な授業づくりの具体化を図る。

1. 授業のデザインと概要

(1)授業内容の構成、目標について

1年前期(15回)の授業であり、受講者は69名、入学当初で初めて教職について学ぶ授業となる。教職課程の出発点として、教職の意義と役割を理解する。また、教職に対する自らの適性を吟味させつつ、職に就き働く意欲を引き出すことをめざす。そのため、次の3点を主な目標に授業内容を構成した。

- ①保育園・幼稚園・小学校それぞれの職務内容の特徴に関する基本的知識を習得する
- ②求められる保育者・教師像について理解を深める
- ③教職の専門性に関する認識を深め、力量形成への意欲を高める

(2)アクティブ・ラーニングを取り入れたコースデザイン

学修者が主体的に課題を発見し、能動的に学修に取り組み、自らの学びを深めていく授業づくりをねらいとし、次のワークを15回の授業の中に位置付けていくことにした。

◆全体でのワーク

- ①講義を聴く(主に導入、まとめの段階)
- ②グループワークをもとにした全体での意見交流

◆ペア・グループワーク

- ①個人ワークをもとに課題についての意見交流をする。
- ②講義で得た、課題に関する知識、情報について意見交流をする。

◆個人ワーク

- ①これまで自らが受けた教育経験(保育経験を含む)、教職に関わる知識・情報を思い起こしながら、課題について考えを記述する。
- ②講義・意見交流をとおして学べたことをジャーナルとして記述する。

今回は、学修者が課題について調べる等のアクティブ・ラーニングは授業では行わず、授業者から資料として示すようにした。

(3)教職論の目標に向かうアクティブ・ラーニングを取り入れた授業デザイン

1年前期の授業であり、教職の意義と役割を理解し、教職の専門性に対する認識を深め、自らの力量形成の課題発見と意欲向上を図るためには、そのために必要な教職に関わる知識・情報の習得は欠かせない。今回は、学修者が課題について調べる等のアクティブ・ラーニングは授業内・授業外では行わず、授業者から講義とともに資料として基本的に示すようにした。そのため、講義とアクティブ・ラーニングを組み合わせることを基本として、授業の組み立てをおこなった。

基本的な授業デザイン

A「講義」→「課題についての個・グループ等での交流」→「全体交流」→「講義」
→「ジャーナルを書く」

B「課題についての個・グループ等での交流」→「講義」→「課題についての個・グループ等での交流」→「全体交流」→「講義」→「ジャーナルを書く」

基本的な授業デザインをもとに各回の授業のねらいに応じて授業構成を工夫する。

(4)内面的思考を深めるのに有効なアクティブ・ラーニングの検討

アクティブ・ラーニングを効果的なものにするには、内面思考の充実が重要となる。講義はもとより、グループ等での協働学習においても、コミュニケーション力とりわけ「聴く力」が求められる。しかし、学修者が何を、どのように聞き思考を深めているのかについては、内面思考を外化し表現しない限り、確かめ評価することはできない。そのため、聞いたことを生かし、考えを書く活動をアクティブ・ラーニングに意図的に位置付けていく。次の観点により、学びの質の深まりを評価していく。

コミュニケーションによる思考の深まりの評価

- ①課題に対し、聞くことにより得た知識・情報を記述できている。
- ②課題に対し聞くことにより得た知識・情報について自分の考えたことを記述している。
- ③課題に対して、他者の考えや関連する情報を生かし、自分の考えを記述している。

(5)ポートフォリオ評価の活用

70人程度の授業では、一人ひとりの学びの見取りは困難なため、学びの質の深まりを評価する手立てとしてポートフォリオ評価を活用する。学修者が自らの学びの履歴を残していき、学びをふり返り学習に対しての自己評価をおこなう。さらに、学びの記録を生かし自らの学びを深める活動につなげる。授業では、具体的に次のようなポートフォリオ評価を活用した学習を設定した。

◆毎時間の終わりに学んだことをジャーナルとして書く（ポートフォリオ）

ジャーナルを書くにあたり、次のような評価の観点を示し、学修者が学びの質を深めることの具体的理解と意識化を図れるようにする。

- ①講義内容のポイントの記述
- ②講義内容についての考えの記述
- ③交流活動を生かした記述
- ④学べたこと、役立てたいことの記述

- ◆ 15回の授業のジャーナルを見直し、レポートを作成する（凝縮ポートフォリオ）
次のような要領で、15回のまとめとしてのレポートを作成させる。
 - ① 15回の授業を通して、授業で学べたこと、役立てたいこと、今後の課題についてレポートを書く。
 - ② 15回のジャーナルを見直しレポートを書く。
- ◆ 60分で、1000字以上2000字以内でレポートを書く。

2 効果的な授業づくりのための考察

どの授業デザインが、学びの質を深めることに有効であったかを考察することにより、アクティブ・ラーニングを効果的に取り入れるポイントを確かめる。学びの質の深まりの考察にあたっては、毎時間の終わりに学んだことを書いたジャーナル、15回の授業のジャーナルを見直し作成したレポートを対象とする。

(1) 15回の授業のジャーナルを見直し作成したレポートからの考察（対象レポート数は69）

- ◆ レポートの記述内容から学びの質の深まりをみると、次のような結果であった。
 - ① 15回のジャーナルを単に書き写している。＜3%＞
 - ② 15回のジャーナルの中から、レポートに取り上げる授業を選び、ジャーナルの記述に考え等を書き加えている。記述は、授業回別に行っている。＜35%＞
 - ③ 15回のジャーナルを見直し、ポイントとなった学びを選択し、授業で学べたこと、役立てたいこと、今後の課題について新たに記述している。＜62%＞

記述内容について①→②→③の順で学びの質の深まりをみることができる。③段階が62%と一定の成果がみられた。この点については、ポートフォリオとしての15回分のジャーナル（学びの記録）がない場合、レポートの記述内容がどうであったかという条件比較はできないが、ポートフォリオ評価を活用したアクティブ・ラーニングは、学びの質の深を深めることに有効であったと考えられる。「15回のジャーナルを読み返してみると、教職の専門性について多く学べたと改めて感じた。特に個に応じた見立てと見立てにもとづく支援について学んだことは、今後生かしていきたい。確かな見立てについては、必要なことをもっと学んでいかないと難しいと分かった。これからの4年間でもっと専門的なことを学んでいきたい。」というレポートの記述例にみられるような、学びの記録を残していくことが、学びの成果をまとめるときに役立ったという記述や口頭でジャーナルがあってよかったという感想が多く聞かれた。このことから、ポートフォリオ評価を活用することが、学びを深めることに有効であったと考えられる。

(2) 毎時間の終わりに学んだことを書いたジャーナルからの考察

レポートの記述内容から学びの質の深まりをみるため、次の①～③を観点として、毎回の

ジャーナルの評価を行なった。

- ①講義内容の断片記述
- ②授業内容のポイントとなる知識の記述のみ
- ③ポイントとなる知識と考え、意見交流の記述

個人の15回のジャーナル記述の変化を見ると、回を重ねることで①から③へと記述内容の深まりが一部の学修者にみられた。しかし、全体的にはこの傾向は見られなかった。各回の記述を比べてみると、第2回、第3回、第8回、第10回、第12回については、③段階の人数が、他の回と比べ25%程度多い結果となった。このような結果については、いくつかの要因が考えられるが、回によりジャーナルの記述に違いが見られたのは、アクティブ・ラーニングをどのように取り入れたかという授業デザインとかがわりが大きいと考えられる。以下では、学びの質を深めるのに有効だったと考えられる授業デザインを取り上げ、効果的な授業づくりのポイントについて考察する。

◆第2回（授業デザイン1）での学修者の学びの検討

1. 授業目標

教職の職務内容についての理解を深め、今後の課題として、職務内容について、深く学ぶことの必要性、意欲を高める。

2. アクティブ・ラーニングを取り入れた授業デザイン

- ①教職の職務内容を知る（講義1）
 - ②学んだ職務内容について、自らの問題として検討する（グループワーク）
 - ・学んだ知識をもとに、「教職の仕事の大変さ・よさに」について意見交流をする。
 - ③全体での意見交流（全体交流）
 - ・グループでの協議内容を交流し、考えを深める。
-
- ④教職の立場で考えることにより、教職への理解や自分の考えを深めることができていることを意識化させる。（学びの深まりのメタ認知に導く）（講義2）
 - ⑤授業での学びを「ジャーナル」として書く。

第2回の授業では、（講義2）が学びの質を深めるポイントとなっている。何を学んだか、どのような学びができたかという自らの学びのメタ認知に導くことで、学びを深めることの意識化ができた。教職の立ち位置から、職務内容を見る経験ができたこと、自らの課題として職務内容を見直せたことで、職務内容（知識）を深く理解できたことが、ジャーナルの記述に多く見られた。アクティブ・ラーニングの学びの価値づけ、学び方のメタ認知の指導は有効であったと考える。

もう一つ有効だった点は、アクティブ・ラーニングの課題設定である。講義1では、教職の職務内容を知識として覚える姿勢が多くの学修者にみられた。しかし、「教職の仕事の大変さ、良さ」について意見を交流するという課題を与えられることにより、職務内容を検討する立場に立たされた。そのことにより、自ら得た知識について深く考える学びへと進むこと

ができていた。アクティブ・ラーニングの課題設定が効果的な授業づくりのポイントとなる。

◆第3回（授業デザイン2）での学修者の学びの検討

1. 授業目標

教職として、子ども、保護者から求められる保育者・教師像について学び、自らのめざす目標を持ち、学ぶ意欲を育てる。

2. アクティブ・ラーニングを取り入れた授業デザイン

- (1)求められる保育者・教師像の予測をする。(個・グループワーク)
- (2)求められる保育者・教師像についての資料提示をする。(講義1)
- (3)現在の自分について、強みと弱みを見直す。(グループワーク)
- (4)授業での学びを「ジャーナル」として書く。

第3回の授業では、まず自分の考えを持つためのアクティブ・ラーニングを行った。このことにより、続く講義で求められる保育者・教師像の情報を提示された時に、自分たちの予想との相違に葛藤を生じる。このことが、求められる保育者・教師像の検討に向かう思考を活性化させることになった。ここで再びこの葛藤や求められる教師像について講義を聴きながら思考したことを話し合うことで外化するグループワークが特に有効であった。1度目の意見交流と比べ、2度目の意見交流は深まりのあるものとなった。これらの学びの流れをつくることが、ジャーナルの記述に思考の深まりが見られたポイントとであると考えられる。

◆第8回（授業デザイン3）での学修者の学びの検討

1. 授業目標

教職の専門性についての理解を深め、今後の課題として、専門性について学ぶことの必要性、意欲を高める。

2. アクティブ・ラーニングを取り入れた授業デザイン

- (1)ケース・事例検討をする。(ペア・グループ)
 - ①ケースの見立て ②見立てにもとづく指導をどうするか
- (2)「子ども理解に基づく指導・支援のポイント」(講義)
 - ・グループワークでの意見を踏まえたケース、事例の解説をする。
 - ・子ども理解に基づく指導・支援の有り方
- (3)授業での学びを「ジャーナル」として書く

ここでは、事例検討のアクティブ・ラーニングをはじめに設定したことが、有効であった。学習者は、必要な知識が十分でない中で、ケース・事例の検討を行う立場に立たされたので、既有的経験から、見立てや対応を考え合った。そのため、一応の検討はできたが、これでよいのかという疑問、どのようにしてこのようなケースに対応していけばよいのかという、知識や情報を求める思いが強く感じられた。そのため、それを受けての講義では、課題が自分のものとなり、課題解決のための必要な知識や情報を得ようと積極的に講義を聞いていたこ

とが、学びの様子やジャーナルの記述内容からもうかがえた。様々なケースを重ねて紹介する中で、いろいろなケースについて適切な見立てをし、子ども理解にもとづく支援ができるようになりたい。そのために専門的な知識をもっと学ぶ必要があるなど、専門性を高めることへの意欲が、ジャーナルの記述にも多く見られた。

課題解決のために必要な知識を得たり、理解を深めたりすることが必要となる場の設定としてのアクティブ・ラーニングが学びを深めることに有効であったと考えられる。

(3)総合的な考察

学修者の能動的な授業参加率を高めるだけにとどまらず、学修者の学びの質を深めるためには、どのようなアクティブ・ラーニングを、どこでどのように取り入れていくのかを検討し、「教職論」の授業実践について考察をおこなった。学びの質を深めることに効果的な授業づくりのためには、次の点がポイントとなることが確かめられた。

- 講義とアクティブ・ラーニングをどのように有機的につなげながら、授業を構成するか。
- どのような課題を設定するのかが、アクティブ・ラーニングでの学びの質を深めるためには重要となる。
- 講義では、必要な知識・情報の伝達と合わせ、学修者が自らの学びや学び方をメタ認知することに導く指導が必要となる。
- 授業目標や授業内容、授業学年等により、どの程度、どのようなアクティブラーニングを取り入れて授業を構成するのかを考えることが必要である。

また、学びの質の深まりを評価する手立ての一つとして、ポートフォリオ評価の活用についても考察をした。今回取り上げた授業では、学びの深まりを評価するため、記述の3つの段階を設定した。今回の評価基準については、記述の仕方を観点として取り上げたが、授業目標、授業内容についても見ていく必要がある。また、ポートフォリオは、学修者の学び、授業の評価であるとともに、自己評価、自らの学びのメタ認知を助けるなど、学修者の能動的な学修を確かにする面も大きい。このような観点からのポートフォリオの活用について、さらに検討していくことも課題としたい。

文献

- 溝上慎一（2014）『アクティブ・ラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂
- 国立教育政策研究所（2016）『資質・能力〔理論編〕（国研ライブラリー）』東洋館出版
- 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター（2015）『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房
- 村川雅弘（2001）『「生きる力」をはぐくむポートフォリオ評価』ぎょうせい
- 森山茂樹（2010）『新しい教職論』酒井書房
- 佐伯胖（2004）『「わかり方の」の探究 思索と行動の原点』小学館

佐伯 胖 (2000) 『「学び」の構造』 東洋館出版

(受付日 : 2016. 12. 10)